上にシラミのとりこ、人間の歩く姿ではありません。いよいよ食べる物がなくなり、苦楽を共にした愛馬の血の一滴までも一斗かんで煮つめて断腸の思いでわけ合って食べました。ナマのニンジン、ナマのとうもろこしをかじり、幾日放浪してきたか、日日などさっぱりおぼえておりません。

ソ連兵に身につく物みんなはぎとられ、ダバイダバイと追い立てられ、トラックに積みこまれたときは、地獄の穴にほおりこまれていっしょに殺されるかと思っておりました。今度は無蓋車に乗せられて、飢えと寒さの夜中、いずくとも知れないところで止まり、懐中電灯をつきつけられ、墨を入れた大男があらゆる物をはぎとり、娘をさがす形相、あのときのおそろしさを言葉なんかで言いあらわせません。

坂下分村は一人として拉致されず、不幸中のさいわいでした。牡丹江の国民学校にごろ寝をしたとき、校庭一ぱい、アミーバー赤痢の便で歩く所のないありさまでした。老若男女、ほとんどが過労と栄養失調、加えて発疹チフス、一夜明ければ死人ばかり。野辺の凍りついた墓に、かける土すらなく、野犬のえ食でした。

待ちわびて頑張りつづけたかいもなく異国に骨を埋めた二百五十六柱の同胞の無念さに落涙するのみ。

母、長男、長女を琿春の地に

岐阜県　中谷信一

昭和二十年八月九日朝七時、団本部に集合の連絡を受け、行くと、鈴木団長、田中副団長、福島校長が顔青ざめ、先ほど琿春県長より日ソ開戦のため団員、男女青年は軍に協力。老幼婦女子は本日正午までに琿春神社境内に貴重品は持参、軽装で避難するようにと電話で命令後、ぶっつり切れて通じなくなったと。二、三日前に降った雨で川は増水しており、琿春橋は第一、第二橋とも日本に爆破され、渡橋不可能、渡船で渡るも、付近は各開拓団の避難民で殺到し、大混乱をしていた。避難列車の時刻は切迫するし、荷物どころか、貴重品まで置きざりで、体だけが琿春駅にたどりつく。鈴木団長ほか三

人を責任者として残し、団に引き返す途中、団員の草場政太郎が牛車とも川におぼれて死亡する事故があった。

一夜明け、十日午後には、軍の命令で、牛車を三十五台、夕方より磐石坑の陣地に向かうようにとのことで、車を準備して雨の降る中、磐石坑陣地に向う。陣地近くに行くと、闇の中より、するどい声で「日本かソ連か」とよばれ驚いた。第一線は占領され、ここまでさがったのだとのこと、負傷兵も二人いた。さっそく引きかえし、相談し、避難準備にかかる。家畜等は全部野ばなしにして、夜中二時頃より下流の渡し場に向う。途中第一線に向う部隊にも出合った。渡船場に着き、夜明けを待ち、朝一番で渡してもらい、朝鮮の慶源駅に向う途中、ソ連機がゆうゆうと低空で飛びまわる姿のにくらしさ、今でも思いだす。図溝江の橋にさしかかると、向う側のほうで黒い人影が「こいこい」の手招きをしているので、たどりつく日本軍の将校一人、兵隊三人、憲兵一人がいて、「今、橋を爆破するところだ。まにあってよかった」とよろこんでくれた。昼食をすまし、慶源駅で列車にのり、三日後に間島市在満国民学校に着き、先に避難をした家族と合流した。私はすぐ兵事部に連絡をした。十五日の夕方、兵事部に集合がかかり、行く。兵事部長のほか数人の人がいて、「今日の終戦の詔勅は巧妙なスパイのデマ放送である。ともかく明朝間島市の在郷軍人は防衛につくから兵事部に集合するように」とのこと。翌朝、私ども二十人、兵事部に行き、間島市の郷軍に合流し、入隊。私どもは予備役となり、待機をした。まもなく、一線部隊より軍旗が帰り、告別式がおこなわれ、それに参列した。その後軍旗を焼き、書類等も焼く。それを見てやっと降伏したことを感じた。

間もなく防衛隊も引揚げ、解散の命令が出て一同家族のもとに帰り、家族も一安心。十七日ついにソ連軍進入。原住民は民国誕生だとよろこび、軍刀をヌキ身でふりまわし、避難所にはいり、「頭をさげろ」などとどなりこむ。私共は隅にかくれて無念さをこらえた。食料は高粱と野菜を少量ずつ、一日二回の配給のみで、極度のショックと栄養不良と主食の高粱の不馴れで下痢患者、その他の病人が出た。そのうちにソ連軍の命令で「難民は琿春に復帰せよ」とのことで、一部の病弱者、および

そのつきそいを残して、難民全員二千数百人の老弱男女が長蛇の列で九月十二日間島市を後にした。約百二十キロの路を十二日間かかり、野宿に野宿をかさね、食料はつきる、老幼婦女子の歩行困難など、あらゆる辛苦障害を克服して、九月二十三日琿春街に着き、旧警察官舎、および東満ホテルに収容された。ただし、健康体の者は、家族とも英安炭鉱に行くよう指令があり、私も入坑日を待つ。入坑当日、母が持病の腹痛をおこし、入坑をことわり、収容所でソ連の使役、原住民の手伝い等で日日を送った。九月も末頃になると、寒さもいっそう加わり、食糧不足に栄養失調、それに、発疹チフス、回帰熱等の伝染病の流行で、犠牲者のほとんどはその病気で死亡した。この時期に一日数人は死んでいった。私どもも病まなかったわけではない。今日か明日かと死の日を待ったことであった。さいわいと生き残った私一家も、全員引揚げたわけではなく、母、長女、長男、と三人を琿春の土にしてきた。昭和二十一年八月三十日、とつじょと内地移送の命令が出て、九月一日に琿春出

朝日開拓団の末路

岐阜県　下島寅三

昭和十五年四月、朝日開拓村計画に基き、団長鈴木享氏に率いられ、入植、以来昭和二十年五月までに五か年二百戸計画の七〇％にあたる百三十八戸、六百人が入植し、団の建設も順調に進み、その完成も間近になっていた。

昭和二十年八月九日未明、ソ連の参戦で、琿春県長より緊急避難命令、「老幼婦女子は当日正午までに琿春街へ即刻避難せよ」その送り出しに大わらわとなる。近況状況からして覚悟はしていたものの、来たるべき到来により、団内は恐怖と不安で騒然となり、絶望感にとらわれた。

警備指導員の指示に従い、団員及び青年団員は団の警備と軍への支援のため、残留し、老幼婦女子は団長引率のもとに午前十時を期して出発、延々長蛇の列をして琿